

事業概要書

事業名	東胆振地域における、木育をキーワードとした子ども震災支援事業				
開始日	2018年10月1日	終了日	2018年12月31日	日数	92日
団体名 (カウンターパート)	特定非営利活動法人いぶり自然学校				
担当者名	代表理事 上田 融	スタッフ人数	2人		

事業費総額 (税込)	1,000,000 円
CF 事業枠	1,000,000 円
その他資金	円

事業目的	<p>胆振東部地震において、特に子どもや親子の心労を「木育」というキーワードで解消させるための体制整備および体験活動の企画と実施を進める。そして、震災後の地域環境を生かした新たな相互扶助システムを構築し、次なる有事が発生したとしても「素早く、適切な」支援ができるためのネットワークを構築する。</p>
事業全体の概要	<p>【背景】 NPO 法人いぶり自然学校は、足かけ 10 年にわたって苫小牧市東部地区に拠点を置き、主に東胆振を活動フィールドとして、主に地域の子どもや親子の自然体験活動・木育推進活動を行ってきた。最近では本州や海外からも子どもや親子が訪れ、東胆振の森林フィールドで森と私たちのつながりを実感するような体験活動や森林整備ボランティア活動を展開し、徐々にその成果や効果が見えてきた矢先に、9月7日に未曾有の大地震が発生し、子どもが関わってきた地域が大打撃を受けることとなった。当法人としては、被災しながらも幸い大きな損傷はなかったことから、地震発生翌日から支援活動に入り、日頃よりお世話になっている苫小牧市東部地区（苫東）、安平町、厚真町、むかわ町において倒壊施設の解体、災害ボランティアセンターの立ち上げといった社会福祉協議会や行政が動き出すまでの初期初動を行った。そして、うまく引き渡せた頃を見計らい、徐々に集まりつつあった本州からのボランティアの滞在拠点を設置し、災害ボランティアセンターが準備しきれないハードの提供（SVC 設置※）と、そこに滞在することで地域住民と顔なじみになり、お互いに信頼される関係を作りながらの支援活動を行った。そのような復旧作業に取り組む一方、被災した子どもたち及び子育て中の保護者は、余震への恐怖と慣れない避難所生活の結果、目に見えないストレスが溜まることとなり、その発散と本来の精神状態を少しでも早く取り戻す支援が急務となった。しかし、それは</p> <p>① 長期的なスパンで粘り強く関わる必要があり、短期での支援では解決しない ② 本州から来た、見知らぬ大人が子どもを支援することは困難である</p> <p>という、従来の支援活動スキームでは解決できない課題であり、地域に住む者が、その</p>

地域で暮らしながら支援を続けるしかない、という結論に達した。そこで、私どものような立場の者が地道に支援を続けられるような体制を作り、「確かに被災したけど、ありがたいことに、うちは大丈夫だった」という地域住民とともに、子どもたちの心の復興を果たすための事業を展開することとなった。

【本事業の実施を通して狙うこと】

- ① 子どもおよび子育て中の親子の居場所を提供することで、震災の影響による心身にたまったストレスをリフレッシュさせるとともに、活動提供者同士のつながりを深め、今後のセイフティネット構築へと展開させる。

まずは、主にプレーパーク手法を用いて、子どもや親子が居心地よく楽しめる場作り、あるいは遠足的な活動を提供し、子どもたちの心の居場所を取り戻すために全力を尽くす。一方、それを継続するためには、多くの支援者による協力が必要であり、その際生じる各提供者同士の連絡調整や意思のすり合わせというプロセスは、特に今回のような場面においては、業界や立場を超えたフラットな関係を構築しやすく、かつ今後に向けた永続的なネットワークを生み出しやすいとも考えられる。さらに、北海道が生み出した「木育」というキーワードは、これまでも各シーンや各業界で使われ、そのネットワークもささやかに継続されてはいたが、すべての関係者が共通の目標を掲げてアクションを起こすまでの訴求力はなかった。今回被災した東胆振地区は、木育という言葉が生まれた当初から木育的活動を展開していた地域でもあるだけに、今こそ「木育で地域を復興させる」「復興が終わったら、街が、人とのつながりが、木育のおかげで前よりもよくなった、仲良くなった」という旗印のもとで活動を引き出す良い機会でもある。そこで、木育をキーワードにした各種キーパーソンにもこのプレーパーク実施に寄与してもらい、現場での活動提供や各種コーディネートを通して、「今度の有事の際も、木育ネットワークが出勤し、子どもと地域を救う」という機運を醸成したい。

- ② それらを展開するための設備（SVC；Smart Volunteer Center※）、備品など、最低限のハードを調達し、効果的かつ効率的に活動が提供できるような場作りを促進させるとともに、そのハードを使いこなせる人材の育成と、次の有事に備え、いつでも使うことができるように、簡易かつ必要十分なバックヤードを確保する。

このような支援活動は、避難所や支援物資保管の関係上、屋内施設を使うことは難しく、概ね屋外での活動提供となることが多い。しかし、災害時においては、それらに必要な道具は炊き出しや被災者救済に優先して使われるため、「子どもの遊び・居場所」へ回ってくることは少なく、なかなか初動を起こせない。そこで、今回の支援活動において必要な、最低限の屋外用備品や道具・物品を揃えて、①のプレーパークなどでの活動提供で利用しつつ、その使い勝手を理解できる人材の確保や、それを保管し、すぐに利用できるような物品庫の確保などを進め、次の有事の

	<p>際に素早く提供できるようなシステムを構築したい。特に、子どもの支援活動は長期にわたるため、少しでも支援者が滞在することができるような SVC 作りに寄与できるような物品をストックしておきたいと考えている。</p> <p>※SVC とは</p> <p><u>Smart Volunteer Center</u> の略語。各地から集まる災害ボランティアが、現地でハードな支援活動の中長期にわたって展開するために、質素でありながらも十分な休息や睡眠がとれるための滞在施設をキャンピングカーやコンテナハウス、グランピングテントを活用して構成する。合わせて、前庭にあたる部分に風雨をしのぐタープや簡易な焚き火台を用意し、ボランティアのミーティング会場として使うだけでなく、倒壊した家屋や倒木などから出る廃材を燃やし、子ども向けのプレーパークとして利用したり、滞在施設を特に保護者の休憩場所（プレーパークカフェ）として利用することを通して、ボランティアと被災した子どもや親子との距離を縮めながら支援活動や復興活動を展開する。</p>
<p>事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)</p>	<p>裨益者 (誰が、何人)</p>
<p>① 木育プレーパークの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主に厚真町、むかわ町穂別地区での定期的なプレーパーク、およびお出かけプレーパーク (遠足) 実施 ・その実施に必要なコーディネーター、ボランティアの派遣 ・実施に関する情報管理、情報発信 	<p>厚真町の子どもおよび親子;30 人×8 日=240 人 むかわ町の子どもおよび親子;20 人×8 日=160 人 安平町の子どもおよび親子;20 人 苫東地区の子どもおよび親子 30 人×4 日=60 人</p>
<p>② 木育プレーパーク実施のための SVC 設置と、今後に向けた管理体制構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SVC 設置のために必要な各種備品の調達およびレンタル ・各種備品の保管に必要なバックヤードの整備 ・各種備品の利用方法を習得するための人材育成 	<p>上記 460 名のほか、滞在ボランティア述べ 30 名</p>